

金壹分ニ貳貫目直、

但年々小買ニ御買上蠟目、木役平均ニシテ、壹本之足り八匁ニ當ル故也、如此定役被仰付候上ハ、直段高直ニ被成下度段達し、御吟味之上、左候ハ、木實不生之年ハ、金納ニ可相納ト定

〔上杉編年文書 三十二〕掟〇中略

一漆の木者皆枯候共、又若木何ほど出来候とも、本役の外指引被成間敷候間、木なへをもそだてべき事、

以上

右條々觸下肝煎百姓等に堅爲申聞、一在所へ一ツ宛書寫し可相渡者也、

慶長九年閏八月二日

山城守〇直江兼續

〔蠟漆舊記 乾〕慶長十九年寅十月中、蒲生飛驒守様御代、漆木役定ル事、

一上々之木 三拾本ニ而 百本役 一上之木 五拾本ニ而 百本役 一中之木 百本

ニ而 百本役 一下之木 百三十本ニ而 百本役 一下々之木 百六十本ニ而 百

本役

ノ五段

慶長十九年寅十月十九日

岡村五左衛門

竹村何右衛門

寛永五辰年ハ同二十年迄加藤左馬之助様御代之内、同六巳年役漆木又法、

一漆木高サ壹丈ハ役漆壹夕ト有リ、但御年貢蠟御取立帳之末、

右之通、此如帳面毎年可被請取候、但改出シ有之候ハ、書付越可申候、以上、

巳十月朔日

守岡主馬